

第1章 本研究の課題と目的

1 本研究の課題と目的

およそ日本列島の古墳時代、朝鮮半島の三国時代にあたる4～6世紀という時期は、漢帝国の滅亡に伴って起きた東アジア規模の人口移動によって、古代中国で培われてきた様々な文物や知識、技術が周辺地域に拡散し、それを滋養分として東北アジア各地に王権が勃興した時期にあたる〔李成市1998、田中2005など〕。本研究で扱う金や銀などの貴金属を用いた金工品は、当該期に中国を起点として東アジア各地に広がっていく代表的な文物とすることができる。当該期に製作された金工品の中には、地域性を抽出できるものが多々ある。これは各地で独自の金工品生産が展開したことを意味し、単にモノが移動するだけでなく、技術をもったヒトが広範な地域に拡散したことを物語っている。金工品は、素材となる金など貴金属の産地や生産量が限定されること、製作にあたって部品の加工・組み立てはもちろん、鍍金や彫金などの専門的な知識・技術を必要とすることから、基本的に東北アジア各地で勃興した各王権の膝下で生産され、その流通にも各王権の政治的意図が内包されていると考えられてきた〔早乙女1990、李熙濬2002、李漢祥2009、諫早2012、金宇大2017、土屋2018など〕。

当然ながらこの考え方には異論もあるだろうし、例外も存在する。そもそも各地から出土する各種金工品が、どこでどのような体制のもとに製作され、流通したのかについては、よくわかっていないというのが実状であろう。その原因には、肝心の金工品製作址がまだ発見されていないということもあるのだろうが、金工品研究が製品ごとに細分化して進められた結果、当該期の金工品生産全体を俯瞰する視角が欠落してしまった感は否めない。また資料が広範な地域に散在することに加えて、稀少性や美術的価値の高さから、それらの多くがそれぞれの国家において国宝などの指定を受け、博物館に常時展示されていることも、比較対象資料を同一の水準で調査する際の障害となっている。東アジア規模での広域流通や、特定の技術がいつ、どこから、どのようにして伝わったのか、という「技術移転」〔鈴木1998〕の問題については、彼我の資料を網羅的、かつ詳細に観察し、その知見を客観的なかたちで提示しながら議論を組み立てていく必要があるが、実際にそれをおこなうことは不可能に近い。多くの先行研究が、比較的アクセスしやすい自国の資料を一次資料とし、それ以外については図面や写真などの二次資料をもとに議論を進めてきた、というのが偽らざる実態ではなかろうか。

研究代表者はこのような状況を克服すべく、様々な金工品に共通して認められる彫金技術に着目し、その痕跡を高倍率写真によって提示する鈴木勉の一連の仕事に多くを学びながら〔鈴木・松林1996、勝部・鈴木1998、鈴木2004など〕、金や銀などを用いた装飾馬具の製作地やその生産体制について検討をおこない、各地における独自の装飾馬具生産の開始と、冠や帯金具などのいわゆる着装型金工品の生産開始が密接に連動していることを明らかにしてきた〔諫早2012、諫早・鈴木2012・2015、諫早2016・2017〕。調査対象には国外の機関が所蔵する資料を多く含むため、現時点ですべての調査成果を公にできていないわけではないが、スケール情報をもつ高倍率写真を通じて各種金工品を横断的に分析する視点と方法、そしてその重要性については、一定の見通しを示すことができたと考える。

一方で研究期間中に日中韓の各地の所蔵機関において調査をおこない、研究対象となる品目やその時間的・空間的範囲を広げていく中で、一つの課題を認識するに至った。それはレンズの歪みやピントの問題である。1 mm以下の加工にピントを合わせて撮影するためには、できる限り被写体にレンズを近づけて撮影するのが最も容易だが、レンズの構造上、被写体に近づけば近づくほど周辺部の歪みは大きくなる。また、スケール情報をもたせるためには被写体だけでなくスケールにもピントを合わせる必要が

あるが、限られた画角の中に被写体とスケールを収め、かつ両方にピントを合わせることは意外と難しい。スケール情報をもつ高倍率写真から彫金の加工痕跡を計測し、そこから議論を組み立てていく際には、このレンズの歪みやピントの問題と正面から向き合っていく必要がある。また上述の方法では、撮影範囲が極めて限られるため、できる限り大量の写真を撮影する必要があるが、大量に撮影すればするほど、資料のどこの部分を撮影したのか、撮影者本人でも判断に困ることがしばしばであった。同じような事態は顕微鏡写真でも起こりうるだろう。

奈良文化財研究所で文化財写真の撮影に携わってきた栗山雅夫によれば、これらの問題を解決するためには長焦点のレンズを使い、現像時にレンズ補正をおこなうことで歪みの影響を少なくした上で、目的の最高倍率を担保しつつ、遺物全体を観察できる距離をとる必要がある。簡単に言えば、できる限り被写体から離れた上で、被写体に施されたすべての彫金を観察できるだけの高精細写真を、各資料所蔵機関において、すなわち可搬性のある装備のみで撮影する必要がある。本書は、そのような目的意識のもと、栗山雅夫と共同でおこなった調査・撮影の成果の一部ということになる。また一部資料については、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室の金田明大・山口欧志の協力のもと、SfM-MVSによる三次元計測を実施し、今回撮影した写真や、直接接触による実測図との比較を試みた。

古代東北アジア世界における金工品の生産と流通の実態に迫っていく上で、高倍率写真を通じた加工痕跡の提示、という鈴木¹の示した方法の有効性は明らかである。議論がスケール情報をもつ高倍率写真から彫金を計測し、計測値を統計的にデータ化して、工房論、さらには工人論にまで進んでいく中〔謙早・鈴木2015、高田貫太・金跳詠2016〕、本研究では今一度、方法論に立ち戻り、残された課題を整理するとともに、現状で考える最善の手段で基礎資料となる写真を蓄積し、写真だけでなく、調査過程で模索した撮影方法を学界で共有することに主眼を置くこととした。

2 調査対象の設定

上述の目的意識のもと、筆者らが当面の調査対象に据えたのが「晋式帯金具」〔藤井2002〕を中心とする帯金具である。晋式帯金具¹とは、「前縁部が弧状、後縁が平直で、龍虎形の獣像を透彫りした変形長方形の帯扣金具、帯先金具と芝草文を透彫りした銚を中心として構成される」、「晋朝で確立した独特の様式」の帯金具であり〔藤井2014：91〕、日中両国を中心に研究が進められてきた²。中国では春秋戦国時代に胡服の一装具として受容されて以来〔町田1995〕、様々な形態の帯金具が製作されるが、日本列島からも出土するようになるのは、この晋式帯金具からである。町田章は晋式帯金具について「将軍位のごとき高級武官の身分を象徴するために政府から配給された装具」とし、日本列島出土事例についても「たんに中国から輸入された品物ではなく、被葬者の生前における身分を象徴するものとして中国から日本に伝達されたもの〔町田1970：48〕」とみた。

晋式帯金具をはじめとする帯金具を調査対象に選んだ理由は、大きく二つある。第一に古代東北アジア、すなわち中国東北部から朝鮮半島、日本列島における金工品の生産・流通という問題を考える上で出発点となる資料であることが挙げられる。晋式帯金具にみられる製作技術、とりわけ本書で注目する彫金技術は、その後、各地で製作された様々な金工品にもまったく同じものが認められる。晋式帯金具に用いられた彫金技術の詳細を把握することは、晋式帯金具の生産・流通構造の解明に留まらず、金工品全体の生産・流通や、技術移転の問題を考える上でも重要である。あわせて、当該期の出土金工品の中で、これだけの空間的広がりをもつ資料は他にないことも付言しておく。

第二に、その形状と大きさ、そして材質などの面から、写真撮影に適していることが挙げられる。帯金具は帯に取り付けるという機能的な制約から、平板な形態をしており、大きさにばらつきが少なく、一定の条件下で同一水準の写真を撮影し、それを一定の倍率で紙面上に提示することを目的とする本研

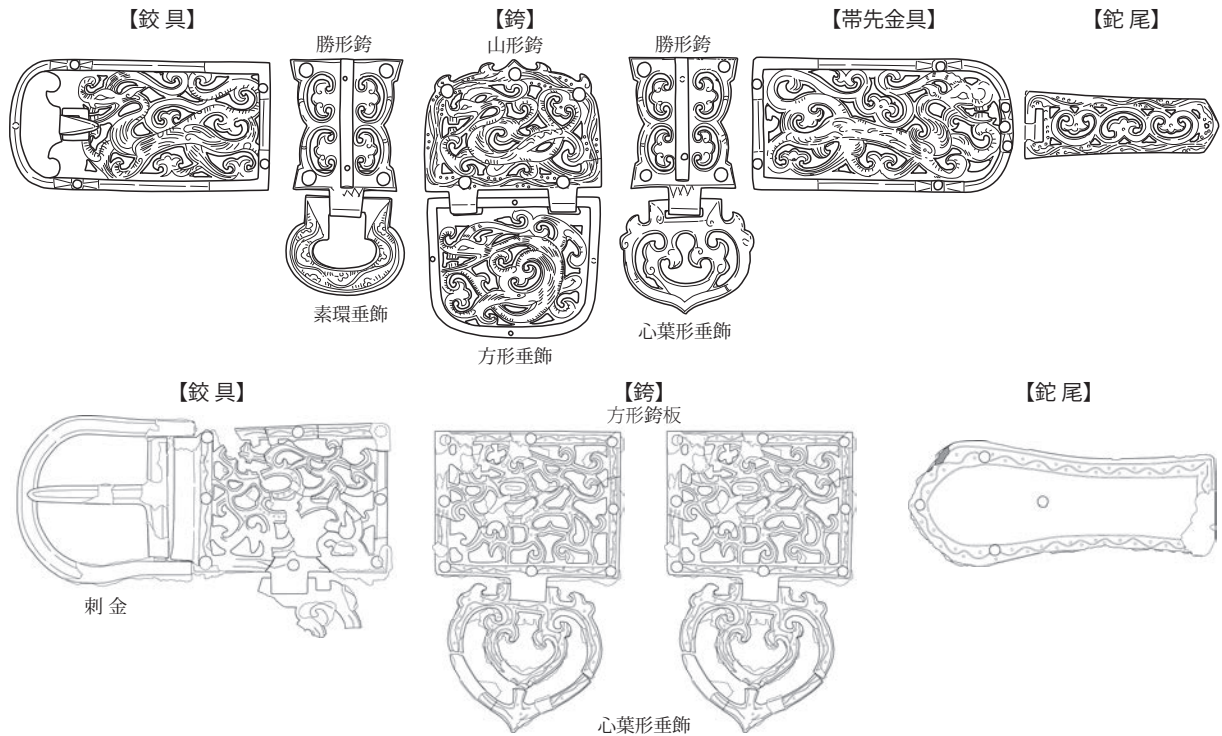


図1 帯金具の部分名称 (上：晋式帯金具、下：龍文透彫帯金具)

究にとって最適の考古資料といえる。また当該期の金工品の中には、晋式帯金具のような金銅製品以外に、鉄地金銅張製品があり、それらの中にも同じような彫金技術が用いられたものがあるが、前者よりも錆化の影響を受けやすく、彫金技術が観察しにくい場合がままある。以上のような理由から、本研究では晋式帯金具を中心とする帯金具にひとまず調査対象を絞った。

なお、今回調査をおこなった晋式帯金具と龍文透彫帯金具の部分名称については、図1に示した通りである。晋式帯金具は「鉸具」と呼ばれる帯の留金具、「鉤」と呼ばれる帯を表飾する金具、「带先金具」と呼ばれる帯の端に付け鉸具と対向する金具、「鉤尾」と呼ばれる帯先につける金具からなる〔町田1970〕。鉤には様々な形態があるが、細分名に関しては藤井康隆〔2014：第48図〕に従う。

龍文透彫帯金具³は、晋式帯金具とは鉸具の形態が大きく異なり、带先金具をもたず、鉤も同一形態・意匠のもので構成される。その製作地や出現過程については意見の一致をみていないが、朝鮮半島や日本列島では晋式帯金具に後続して出現する帯金具である。確実に中国以外の地域で製作されたものが含まれることも特徴で⁴、日本列島出土品についても舶載品とみる意見と、初期の倭製金工品とみる意見が対峙している。

帯金具の製作技術については、小林謙一〔1982〕や杉山晋作〔1991〕の視点を発展させ、部品の形状を作出するための「成形技法」、施文や立体表現をおこなうための「彫金技法」、そして「製作工程」（鍍金、成形、彫金の前後関係）にわけた上で、それぞれの分類案を示した岩本崇〔2015〕の整理が参考となる。これらの諸要素のうち、本研究と最も深く関わる彫金技術の分類に関しては、素材を叩いて凹ませる「塑性加工」と、素材の一部を削り取る「切削加工」に大別した上で、細分をおこなった鈴木勉〔鈴木・松林1996、勝部・鈴木1998、鈴木2003・2004など〕の一連の研究結果が重要である。今回調査をおこなった晋式帯金具と龍文透彫帯金具に関していえば、「点文」（点打ち）と「円文」（魚子文）⁵、「蹴り彫り」と「毛彫り」という四つの彫金技法が用いられており（図2・3）、このうち前三者が塑性加工、後一者が切削加工に該当する。これらの違いは実物大以下で示されることの多い既存の実測図では正確に表現することが難しく、高倍率写真の提示が不可欠であることは上述した通りである。

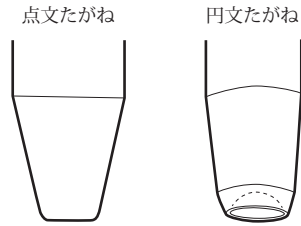


図2 点文たがねと円文たがね
〔諫早・鈴木2015〕より転載

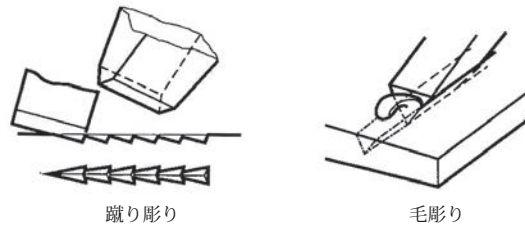


図3 蹴り彫りと毛彫り
〔古川2018〕より転載。原図は〔鈴木2004〕

3 調査の実施

本研究では、以下の6例の帯金具について調査・撮影をおこなった。また一部の資料に対して、SfM-MVSによる三次元計測を試験的に実施した。

- ①奈良県 新山古墳出土帯金具（宮内庁書陵部・京都大学総合博物館所蔵）
- ②兵庫県 行者塚古墳出土帯金具（加古川市教育委員会所蔵）
- ③奈良県 五條猫塚古墳出土帯金具（奈良国立博物館所蔵）
- ④大阪府 七観古墳出土帯金具（京都大学総合博物館所蔵）
- ⑤天理大学附属天理参考館所蔵 伝中国出土帯金具
- ⑥京都大学総合博物館所蔵 伝中国出土帯金具

このうち①・②・⑤・⑥が晋式帯金具、③・④が龍文透彫帯金具と一般に呼ばれる資料であり、①～④は出土資料、⑤・⑥は出土地不明の伝世資料にあたる。どちらも東アジア各地に広がる資料群全体の中のごく一部を調査したに過ぎず、日本国内所蔵資料を網羅したわけでもないが、出土事例の少ない晋式帯金具に関しては、結果的に日本列島から出土したものをすべて調査・撮影したこととなる。なお調査にあたって図面のないものについては、新たに実測図を作成した。実測図の作成にあたって外形および断面については直接計測し、透かし彫りや彫金については今回撮影した高倍率写真を実物の2倍の大きさに印刷してトレースをおこない、両者を合成した。

なお、調査の実施および調査成果の公表にあたっては、各資料所蔵機関より格別の配慮を得たことをここに明記し、深甚な謝意を表する。（諫早直人）

註

- 1) 晋式帯金具は中国では「晋式帯扣」と呼ばれ〔孫機1987〕、諸氏の分類に照らせば「帯金具Ⅰ」〔町田1970〕、「帯金具Ⅰa類」〔早乙女1990〕、「A類」〔坂1991〕、「Ⅰ類」〔田中1998〕、「Ⅰ類」〔宇野2000〕、「Ⅰ群帯金具」〔藤井2002〕、「金銅製三葉文・龍文透彫帯金具」〔岩本2015〕がこれにおおむね該当する。
- 2) 晋式帯金具の研究史については〔藤井2014〕参照。
- 3) 諸氏の分類に照らせば「帯金具Ⅱ—a」〔町田1970〕、「帯金具Ⅰb類」〔早乙女1990〕、「Ⅰ式」〔小浜1993〕、「Ⅱa類」〔宇野2000〕、「ⅡA1式」〔藤井2001〕、「a式」〔高田2014〕がこれにおおむね該当する。
- 4) 慶州皇南大塚南墳出土金銅製龍文透彫帯金具は、帯本体と帯金具の間にタマムシの翅を敷き詰めている。皇南大塚南墳には、帯金具以外にもタマムシの翅を敷き詰めた金銅製品が複数あり、これらは新羅の特定の工房で一括して製作された可能性が高い〔諫早2012・2016〕。
- 5) 「点打ち」は線彫り技法の一つとされるが〔鈴木2003・2004など〕、同様の工具による加工痕跡は線彫り以外にも認められる。本書では線彫りに限らず、「点」を陽刻した加工痕跡を「点文」と呼ぶ。一方、「円」を陰刻した加工痕跡については、奈良時代（唐代）の「魚々子文」と区別すべきとする鈴木勉の意見に従い、本書では「円文」と呼ぶ。